

奪われた

アイススピナー

「ここまでくると……才能よね、それ」

アツシユの報告に、アナは苦笑混じりに漏らした。

「成長が無いというか、なんていうか……」

ちらりと、アツシユを見ながら言葉を続ける。

「まあた、それを懲りずに頼まれちゃう方もと

ーかと思うけどねえ」

くすくす嘲笑^{あざわら}うアナに、アツシユは少し顔を

赤らめ反論する。

「しょうがねーだろ。あいつ、直接俺に依頼したら断られるのわかってて、わざわざジツドを通してきやがった」

はあ、と深く溜息をつきながら頭を垂れ、右手を垂れた頭の上に乗せる。

ジツドはアツシユの叔父である。それと同時に彼のマネージャー兼トレーナーとして、ハンターの仕事を仲介し任せたりもしている。

その為もあり、基本的にジツドの取ってきた仕事をアツシユは断れない。もちろん愚痴を散々吐くことを忘れたこともないが。

「あの野郎、そーいう所だけ妙に知恵をつけやがって……他も成長しろってんだよ」

面を上げたその顔は、眉をひそめ、苦々しい顔つきになっていた。

「で……また私達に協力して欲しいって事？」

面白そうだから自分はOKだと付け加え、尋ねた。

「というより、報告だな。もうクロエには話を通したから。お前は絶対ついてくるからいいでしょうってさ」

妹に仕切られたことはあまり面白くはないが、さして気にはならない。

アナもまた、クロエというマネージャーが持ち込む仕事を断れないのだ。

過去、自分勝手に「面白そう」という理由だけで仕事を受けた結果、妹に心配と迷惑を散々かけたことがある。それだけに、以後妹にはあまり逆らわないようにしているのだ。

もちろん、だからといってアナが大人しくなった、というわけではないのだが。

「で、そのクロエは？」

自分のマネージャーが、間接的な依頼主であるアッシュと一緒にいないことに疑問を持った。

「ああ。今ジッドと一緒にギャラの交渉をしている」

答えは、大本の依頼主がさぞ泣きつ面のまま困惑しているだろうことが容易に思い描けるものだった。それだけに、二人はその様子を想像しただけで笑いがこみ上げてきた。

§ § § § § § § § § § § § § § § §

「ボクの大切なアイススピナー。パパから貰っ

たアイススピナー。とっても大事にしてたのに……お願いだよお、取り返して来てくれよお」

これが、今回の依頼内容である。

アイススピナー。以前ヒートソードを奪還する際にクロエが使っていたスライサーを見て憧れ、ホプキンスが自分の父にねだって貰った物らしい。当然彼の父、パガニーニがコレクションしていた物だけに、相当値打ちのある物なのは間違いない。スピナー自体は投^{スライサー}剣という系統の中でもさして強い物ではないが。

「あともうちょっとで、デ・ロール・レを倒せる所だったのに……」

本当かよ？と疑いたくもなるアッシュだったが、依頼主であるホプキンスのテクニクレベルが実力に比例せず高いことを知っているだけ、可能性はあると納得してしまう。

「まあその真偽はさておいて」

疑っていたのはアッシュだけではなかったらしい。

「アイススピナーをデ・ロール・レと戦っている

最中に無くしたつてのは本当なんですよ？」

コクコクと、しきりに首を振るホプキンス。

「だったら、あの下水道まで行くしかないよね」

アナの提案はもつともだ。とりあえずはそこへ行くしかない。ただ問題は……。

「また飲み込まれていたとしたら、厄介ね」

クロエが心配する、アイススピナーの行方。

「……また腹かつさばくのは勘弁して欲しいぜ」

以前の依頼で見舞われた惨劇。それを繰り返すことだけはどうしても避けたかった。

「ホプキンスさん。無くした時の状況を、もう少し詳しく話して貰える？」

間抜けなフォースはうなずき、説明を始める。

「スライサーって、投げて使うでしょ？だからこうやって……」

右手を握りしめ、腕を頭上に上げ、アイススピナーを構える仕草を真似る。

「こう、投げたんだ。そしたらそのまま飛んでいつて戻ってこなかったんだよお」

ホプキンスの説明に、ハンター三人は違和感

を覚えた。何かがおかしい。

「……ちよつとまでホプキンス。お前、アイススピナーそのものを投げたのか？」

「うん……」

スライサーは「投剣」とも呼ばれる遠距離用武器である。この武器は、フォトンの刃を発射し複数の敵をなぎ倒すことが出来る。つまり、本体そのものを投げて使う武器ではない。

「……アホか、お前は……」

「え？え？違ったの？」

ただただ只々、三人は呆れるばかりで二の句が継げなかった。

確かに、武器自体がブーメランに似た形状をしている為、本体を投げて使う物と勘違いするかもしれない。

しかしそれはあくまで投剣という武器を知らない一般の人々ならば、という話に過ぎない。

ハンターズギルドに登録しているホプキンスが、たとえフォースで投剣を多用しない立場にあるとはいえ、扱いを知らないというのはあ

まりにも……。

「とりあえず下水道に向かおうよ」

「だな。下手すると川に落ちてるかもなあ」

「そうだとすると厄介……というより無理ですね。まあ現場を見てから考えましょうか」

「ちよつと待ってよお……ねえ、それって常識？
ねえ、ねえ！」

この仕事は疲れる。

武器を探す事とか、強敵を相手にする事とか、そういう事とは次元の違う疲れを、三人は感じていた。

§ § § § § § § § § § § § § § § §

四人にとって、いや約一名を除いて、道中のエネミーはさしたる障害にはなっていないかった。

障害は、パイオニアの者達が置いていったセキュリティーシステム。

「この扉、スイッチを同時に押す必要があるみ

たいけど……」

「あー、とりあえずこれみたいだな。後一つは？」

「アレじゃない？ 対岸のアレ」

「みたいだな……おいホプキンス、これ押したまま立ってろ」

「えー、また留守番？」

侵入者を容易に近づけない為の仕掛け。どうしてそのような設備が必要だったのかは……いまだに謎ではあるのだが、少なくとも、多くのハンター達にとって厄介以外の何物でもない。

片方のスイッチにたどり着くまでには、おそらくエネミーが待ちかまえているだろう。それを見越し、とりあえずスイッチに置物ホプキンスを残し、アッシュ達は対岸のスイッチへと急いだ。

案の定、道中にはエネミーが待ちかまえていた。そこまでは予測通りだった。

「よし、これでOKだな」

二つのスイッチを同時に押したことで、扉は開いた。しかしこのスイッチ、これだけではな

かったのだ。

「うわあ！ 敵^{エネミー}が出てきた！」

どうやら、扉を開けるとどこからともなくエネミーを招き寄せる仕組みが施^{ほどこ}されていたようだ。

「ちっ！ 待つてろすぐ行く！」

来た道を慌てて引き返す三人。とてもではないが、ホプキンス一人で切り抜けられるとは思えなかった。

しかしそれでも、テクニクを連発しなんとか場をしのぐと躍^{やっき}起になるホプキンス。そんな彼に、次の罠^{わな}が待ちかまえていた。

ボム！

「ぎゃあ！」

エネミーだけではなかったのだ。スイッチによつて大量のトラップまでもが、ホプキンスが待つ部屋にばらまかれていたのだ。

「トラップビジョンで罠を確認して！」

「そんなの持つてないよお！ 助けてよお！ アツシュウ！」

クロエの指示に即答するが、答えは至つて情けないもの。

「つたく、準備のわりい奴だな」

懐^{ふところ}を探り、自分も用意していなかったことを確認したアツシュのこの言葉は、はたして誰に対して言った苦言^{くげん}だったのだろうか？

「今行くから、そこをう……」

アツシュの指示は、途中で切れた。

ボム！

真つ先に部屋に入ったアツシュもまた、トラップにかかり爆風に巻き込まれたのだ。

「アツシュ君も突つ込まない！ 今機雷^{トラップ}解除するから！」

準備していた罠感知アイテム、トラップビジョンを用い機雷^{トラップ}の位置と数を確認する。

「ラズンデ！ ホプキンスさんはこっちに！」

雷撃で複数の機雷^{トラップ}を駆除したクロエが叫ぶ。

「ほら、アツシュも寝てないで行くよ！」

機雷^{トラップ}は駆除しても、エネミーはまだ複数迫ってくる。折角開けた扉へ向かう為にも、こいつ

ない。

「はい、これ」

そんなアッシュに、クロエは一振りの剣を手渡した。

「……これは？」

クレイモア。大剣と呼ばれる系統武器の一つで、そこそこの攻撃力を誇る物だ。大剣は大きいが故に扱いにくいのが、大きいが故に複数の敵をまとめてなぎ払うことが出来る。

「デ・ロール・レは時折、筏の上に身体を乗せてくるから。そのチャンス逃さず、身体をその剣で斬りつけて。大きいだけに、その剣で一気に斬りつけるのが効果的な。ああそうそう。頭の甲羅は堅いから、そっちは無視して身体を狙ってね」

出発前から、クロエには見抜かれていたのだ。アッシュが対策を尋ねるのを洩ることも、その対策の準備を怠るであらう事も。

「あ……ん……」

何かを言いかけたが、言いよどんだ。ここで

何か言い訳をしたところで、格好悪いのは自分だけなのだ。今の状況はあまり格好の良い物ではないが、それをさらに悪くする事もない。

（ジッドだな……余計なことを……）

クロエも気が利く女性だが、その影に自分の叔父がいることを何となく悟った。ジッドとクロエは二人でホプキンスと交渉をしていた。その時おそらく、ジッドに託されたのがこの剣なのだろう。

いまだ半人前扱いされているのを嫌うアッシュは、ジッドの言うことを素直には聞かない。ならばクロエに託した方が素直に受け取るだろう。そんな打算が見え隠れしているだけに、余計に腹立たしい。

が、二人の気遣いにケチを付けるのは筋違いだろう。元々は自分の厄介なだけの強情さの為、二人に気を使わせているのだから。

それは解っている。解っているからこそ口には出さないが、しかし全て納得出来るわけでもない。釈然としなない面持ちのままワープ装置

www.pearsoned.com

「見事に刺さってるわ……」

論理を口で言うだけなら簡単だ。しかしそれをどう実行するか？

「飛び出すなよ、アツシュ」

「わかつてる！」

「あ、そうか」

募るイライラは、隣に置かれたテクニクマ

シーンに向けられた。

しかしアッシュの言うことはもつとも。ハンターが手を出しにくい状況でも、フォースのテクニクならば有効だ。

「ラフォイエー！」

ドゴーン！

派手な音と炎が、ムカデを包む。しかしその爆炎も、ムカデの巨体に比べればまだまだ小さい。

「ラフォイエー！」

しかし、ムカデに効果的なのは確か。クロエのスライサーは多少広範囲に敵を傷つけているようだが、ホプキンスの爆炎の方が遙かに効果範囲が広い。

「よし、良い感じだぞ」

珍しく、アッシュはホプキンスに感心していた。このままではムカデが筏にへばりつく前に倒してしまうのでは？という程の勢いがあったのだから当然といえば当然。

しかし、やはりホプキンスはホプキンス。長

続きはしない。

「ふう……疲れた。もうダメだ」

「おめえなあ！」

ホプキンスのテクニクは非常に高レベルだ。しかし、それはマグやユニットといった補助装備で精神力を底上げした結果、である。つまりホプキンス自身は高い精神力を持ち合わせているわけではない。ようするに、高レベルのテクニクを扱うだけの鍛錬をこれまでにしていないということ。

テクニクは魔法ではなく、科学的な技術の産物だ。しかし使用には精神を激しく消費する。この消費は、高レベルであればあるだけ、大きい。

何の鍛錬もしていないホプキンスが高レベルのテクニクを連発すれば、すぐに精神を消費しきり、どっと疲れが押し寄せるのも当然だ。

「精神回復材はどうした！」

「もうみんな使っちゃったよ……ここに来るまでもにいっぱい戦ったしい……」

底の抜けたビア樽に、フルイドという精神活性剤ビールを注いだところで、すぐ空になるのは明らかというもの。

「まったく使えねえなお前は！」

結局、アッシュのイライラは増すだけだった。

「アッシュ、来るよ！」

そんなイライラをやっと発散するチャンスが巡ってきた。

「よしっ！」

一気に駆け寄り、思いの丈をクレイモアに託しぶつける……つもりだった。

「ダメ！」

クロエの制止は、間に合わなかった。

ガン！

「ぶっ！」

完全に潰されることはなかったものの、ムカデが筏に乗る衝撃に、アッシュは巻き込まれた。

「まったく、慌てて突っ込むから！」

素早くムカデの頭に飛び乗ったアナが、無様に倒れ込んだアッシュを見下ろしながらばやい

た。

「……」

返す言葉がない。この気恥ずかしさと怒りを、今までのイライラに上乘せし、無言のままアッシュは大剣クレイモアを振り回した。

「OK！スピナーは取り返したよ！」

ひらりとムカデから飛び降りたアナは、取り戻したスピナーを掲げるように見せ、依頼完了を宣言した。

しかし、依頼は終わっても戦いは終わらない。

ドカツ！

「うひゃあ！」

ムカデもただ、やられるばかりではない。触手を鋭く突き刺そうと、ホプキンスを狙い始めた。

「助けてアッシュウ！」

「バカ、こつちに来るな！」

ムカデは執拗しつようにホプキンスを狙っていた。

その標的であるホプキンスが、アッシュの元へと助けを求め駆け寄ってくる。つまりそれは

ドカツ！

アッシュも巻き込まれることを意味する。

「離れるグラサンデブ！攻撃に集中できねえだろ！」

器用に触手をかわし続けながらも交わされる
会話。もはや二人の言動は漫才と言うに等しい。

١٠٠٠

「まあ、無事依頼をこなせて良かったじゃないか」

報酬を手にしたアッシュを出迎えたのは、今回の依頼を勝手に引き受けた叔父だった。

「冗談じゃないぜ……もうあいつの依頼はお断りだからな！」

クレイモアを返しながら、いつもの愚痴がアツシユの口からもたらされた。

「そういうな。俺もパガニー二さんとの付き合い合
いというのがあつてな。そのご子息の頼みとな
れば、聞かないわけにもいかんだろう」

「だからって、俺を巻き込むなよ……」

多方面に顔の利くジツドは、それが売りでもあるが、気苦労も耐えない。常に人との接点を絶えないようにする為には「付き合い」というのが非常に重要なのだ。

アッシュはジッドの顔が広い恩恵、つまり依頼をスムーズに請け負うという「得」を受けている。その代わり、ジッド付き合いに巻き込まれるという「損」も受ける。

一長一短。理解しているだけに、アッシュもあまり強くは言い返さない。

「まあ、ホプキンス君もこれで懲りただろう。もう彼からこんな依頼が来ることもないさ」

いや、それはない。あいつが懲りるはずがない。そんな妙で憂鬱な確信が、アッシュにはあった。

二度あることは三度あるという。そんな言葉

は迷信だと、言いたい。言いたいが、とても言い切れるものではない。

「……はあ」

溜息の重さが、気の重さ。せめてもの救いは、手にしたメセタもそれなりに重い事だろうか。

「安くても良いから、もつとかつかいいい依頼は無いのかよ……」

深い溜息の向こうに、その答えはあるのだろうか？

なんだか、溜息の回数が増え、深くなっている事にはたと気付き、また憂鬱になる。

つまりはそれが答えなのだろうか？だとしたら、不幸な日々はまだ続きそうだ。